

Maugham の一人称小説

「Cakes and Ale」論

田 中 正 志

(一)

William Somerset Maugham (1874 ~ 1965) の56才の作家として円熟期にこの *Cakes and Ale* はかかれた作品で Maugham 自身、この小説は大変気に入る、80才の誕生日の記念出版としてこの小説を豪華本として出していることからもうかがえる。

Maugham は Modern Library から出版された *Cakes and Ale* に彼自身による introduction をかいているが、その中で *Of Human Bondage* が彼の作品で最高のものだという点で一般の意見に賛成する。それは作家が一回しかかけないたぐいの本である。結局のところ、生涯は一度しかないからである。わたしが一番好んでいる本は *Cakes and Ale* である。それは書くのに楽しい本だった¹⁾と述べている。また Robert Lorin Calder は *Cakes and Ale* は注目すべき作品であり、その理由はそれが特別な文学的流行を背景にしてかかれたなじみ深い型に従っていない、Maugham の正典のうちのきわめて数少ない本の一つだからである。どんな傾向の所産でもない。Maugham のこの小説を構成する糸を批評家が発見できるどんな直接の先駆的作品もない。作者はここで、自分の能力と限界を心得て、完全に自己独自の作品を打ちだし、その結果は目を見張る改革的作品ではないにせよ、*Cakes and Ale* は独創的な作品である²⁾と絶讃している。

(二)

Maugham は虚構ではなくて、事実をそのままに告白するかのようにみせかけることによって架空の fiction を本当らしく読者に受けとらせる工夫をして、大変効果的にしている一人称「わたし」で、この *Cakes and Ale* をかき Robert Lorin Calder をして、技巧的にいって *Cakes and Ale* は Maugham の最高傑作であると言わしめている。「わたし」は自分の文学論を述べているが、この小説の特長はすばらしい諷刺にあり、かつ、示唆に富んでいる。この一人称小説の方法そのものについて「わたし」の次のような弁がある。

Sometimes the novelist feels himself like God and is prepared to tell you everything about his characters; sometimes, however, he does not; and then he tells you not everything that is to be known about them but the little he knows himself; and since as we grow older we feel ourselves less and less like God I should not be surprised to learn that with advancing years the novelist grows less and less inclined to describe more than his own experience has given him. The first person singular is a very useful device for this limited purpose.³⁾

この *Cakes and Ale* は作者自身の経験をそのまま、「わたし」、即ち、William Ashenden の経験として、回想的に語らせることによって、物語に真実さをもたせる手法をとっている。さらに、この小説は主人公の評伝を扱っているが、評伝というものは、歴史的に順々に述べられるべきものなのに、この小説ではしばしば、逆転し、その逆転がこの小説の構成上の弛緩を感じさせ、真実みある話であるように我々をして錯覚に導くのである。

(三)

この小説の舞台は London と Kent 州、小説家である50才も半ばすぎた「わたし」Ashenden が語り手として、脇役の如く、またあるときは主人公の如く自分の思想を喜々として主張する。友人の小説家 Alroy Kear から留守中に電話を受けるところから始まる。Alroy Kear は従男爵の息子で Oxford 出身、

政界，社交界に通じ，最近めきめき頭角をあらわしてきた作家である。「わたし」はこの男に対しては才能を認めず，ただ世渡りがうまく，いつしか文壇に確固たる地位を占めたという努力の人程度にしか考えていない。ずいぶん音沙汰がなくて食事に招待するには，何か下心があるにちがいないと思いつつ会うことにする。結果として判明したことは，最近死去した「イギリス文壇における偉大な古典的存在」Edward Driffield の前半生とその悪名高い前夫人について，昔，彼及び彼の妻と親しく交際していた「わたし」に回想的なメモをかいてもらいたいということであった。Alroy は現在の Driffield 未亡人から夫の伝記の執筆を依頼されているのであった。「わたし」がこの Driffield 及び彼の妻 Rosie に初めて出合ったのは15才の時で，夏休みになって Blackstable の伯父の牧師館に帰省している時であった。Driffield は Blackstable の生れで，彼の最初の妻 Rosie とこの地に住みついていた。

Of Human Bondage の Philip と状況は同様で少年時代は俗物な牧師夫妻とのあまり快適といえない生活を「わたし」は送る設定となっている。Maugham 自身，少年時代ののがにがしい体験は56才になっても，心にいつまでもやきついていることがこのことからしてもうかがえる。

Driffield は過去にいろいろな職業を転々とした後，今では作家であるが，この Blackstable での評判はよくない上，また保守的な田舎町では彼の妻 Rosie の bar で働いていたという前歴，その奔放な生活態度から町の人々のひんしゅくを買っている。ところが，「わたし」と Driffield 夫妻はお互に好意をもち休暇で帰省する毎に夫妻を訪ねるのであった。牧師の伯父はこのことを大変心よしとしないことなので「わたし」は Driffield 夫妻に会うことを秘密にしていた。ある年の夏休み，Blackstable に帰省してみると Driffield 夫妻は夜逃げをしていた。それから5年ばかりたって，「わたし」は医学生になり，London で下宿生活をしていた。その London でたまたま Rosie に再会する。その時，初めて青年として成長していた「わたし」は Rosie を美しい女性としてみる。一方，Driffield は今や文壇の大家で土曜日ごとに芸術家たちが集まり，密かに作家を志願している「わたし」もその集まりに積極的に参加する。Driffield の家

に集う芸術家たちは彼の妻 Rosie がお目当てであり、Rosie も実にどの男に対しても親切で、相手を選ばず交友関係をもつルーズな女である。ある夜、「わたし」は Rosie と一緒に芝居を見に行つての帰り「わたし」は自分の下宿に彼女を誘い、一夜を共にするが Rosie は自分だけのものではないことを知り、強い jealousy をいだく。その後、Rosie は Blackstable で破産した石炭商の George Kemp とアメリカへ駆け落ちしていく。彼女の夫 Drifffield は shock を受けるが上流階級に属する Mrs. Trafford は失意の Drifffield を一年以上も自分の家に住ませ、いろいろと世話をし彼を大作家への道へ進ませた。その後、肺炎という病魔におそわれ、そのときの看護婦 Amy と結婚し再起。そして84才の天寿を全うして栄光のうちに Drifffield は死んでいく。

「わたし」は Alroy と Drifffield の二番目の妻 Amy と三人で Rosie の若い頃の話を話し合った。Alroy は屈強な田舎娘といい、Amy は白人と黒人の混血児で、色情狂いと、それぞれが Rosie に対して悪意に満ちた言葉を投げかけた。それに対して「わたし」は次のように反駁している。

“That’s where you make a mistake,” I replied. “She was a very nice woman. I never saw her in a bad temper. You only had to say you wanted something for her to give it to you. I never heard her say a disagreeable thing about anyone. She had a heart of gold.”⁴⁾

“You don’t understand,” I said. “She was a very simple woman. Her instincts were healthy and ingenuous. She loved to make people happy. She loved love.”

“Do you call that love?”

“Well, then, the act of love. She was naturally affectionate. When she liked anyone it was quite natural for her to go to bed with him. She never thought twice about it. It was not vice; it wasn’t lasciviousness; it was her nature. She gave herself as naturally as the sun gives heat or the flowers their perfume. It was a pleasure to her and she liked to give pleasure to others. It had no effect on her character; she remained sincere, unspoiled, and artless.”⁵⁾

Alroy と Amy が Rosie に対して毒舌をはけばはく程、「わたし」は熱心に彼女の天使のような振り、やさしさを彼ら二人に言い張る。

ついに Amy は Rosie はすでに10年前に死んでいるけど……と。

Cakes and Ale の climax は最後の26章で Alroy と Amy に冷笑をあげせているのである。

真実は Rosie は生きていた。「わたし」は New York に芝居を演出するために出かけ、そのことが宣伝係によって各方面に広告されたため、ある日、一通の手紙を受けとり、その差出人が Rosie であった。彼女のアパートを訪ねて久しぶりに再会する。Rosie は少なくとも70才になっており、ダイヤモンドで飾り、彼女の髪は昔のように豊かであったが、すっかり白くなり、太り、肌は赤くなっていたが、健康で元気一杯で昔と少しも変わっていない微笑をたたえていた。それに、昔のとおり子供っぽいところがあった。George Kemp はすでに死んでいた。彼はアメリカで大いに働き、かなりの財産を彼女に残したという。イギリス文壇の大家のかつての妻ということは秘密にしていた。今では Rosie Iggulden と改名していた。二人は昔のことを回想しつつ再会を喜ぶ。

Rosie と Drifffield との間に生れた娘が6才で脳膜炎で病死したときの苦しみ、悲しみを Rosie は以前からの顔みしりで喜劇の脇役を演じていた Harry と会い、彼の家で一晩すごして、まぎらわし、Drifffield はそれを「生命の盃」と題して小説にかくことによって耐えたことや、破産した George Kemp に同情して渡米したことなどを聞かされた。

(四)

この作品は現在と過去が交錯し転倒することで物語は展開する。「わたし」が15才の年、夏休みで帰省していた時に、ふとしたことから Drifffield 夫妻と知り合いになった少年時代の過去。「わたし」が Rosie と親しくなり彼女が駆け落ちするまでの過去。Drifffield の晩年と彼の死後の数年の現在。これらの時間の経過が順々に語られるのではなく、時間の転倒の連続である。Robert Lorin Calder が言うようにこの *Cakes and Ale* は Maugham の生涯で劇、短編、長編小説等、幾多の作品を世に残したが彼の名声が未来において残る作品であろう。

Maugham はこの作品に対する抒情的温かさ、一人称小説技巧のうまさ、時の転換の卓越、女主人公 Rosie の特異な性格描写、田舎町の社会的環境、心理学、哲学的観察と社会的、文学的、文壇的批判等々の糸を複雑に交錯させ、いとも洗練されたうまさで物語を発展させている。

Cakes and Ale の語り手 Ashenden と *Of Human Bondage* の主人公 Philip は同一人物で Blackstable で俗物の牧師夫妻に養育され、少年時代を Public school の寮生活を送り、休暇で帰省、そしてその後、医学生になる。これは言うまでもなく、作家 Maugham 自身であり、上記二つの作品で本人が登場していることになる。しかし *Of Human Bondage* では Philip は平凡な女性 Sally と結婚するが *Cakes and Ale* では Ashenden は作家であり、London で下宿し、独身生活をする。小説の役割としてはこの二つの作品では全々異なる。Philip は全くの主人公であるが Ashenden はこの小説の特異な手法の一人称単数「わたし」で主人公ではなく one of them にすぎず、観察、解説担当の端役を演じている。*Cakes and Ale* では Rosie や Driffield 等、登場人物が織りなす人間模様、性格に応じた運命、人間関係を通じて作り出されてる人間の生き様を描いている。ironical な観察の中にも、美的要素を含み、全体的には虚無的なむなしさを保持している。従ってこの作品は本質的には realism ではあるが romance 的要素も注入されている。それは自然のままというか、本能的というか、自分が好きになった男性とは誰彼となく、一夜を共にするという天真爛漫さ、それでも素朴で清純さをもつ Rosie の姿であり、心である。

Maugham は Rosie を非写実的で不自然に描くことで、ごみの山積した中に咲く一輪の花のような美を求めたのであろう。

(五)

Rosie のモデルについて Maugham 自身が回想録を発表して次のように言及している。

“Among the many friends I had made before I went to Paris was a Mrs. Stephens,...She knew everyone in the literary and theatrical world of the day...and throughout the summer gave afternoon parties to which she would invite her friends. At one of these I met a very pretty young woman. She had pale golden hair and blue eyes; except that she was less florid and less buxom, she reminded one of one of Renoir’s luscious nudes. She had a lovely figure, but her chief grace was her smile. She had the most beautiful smile I had ever seen on a human being. After that meeting I saw her often. She was by way of being an actress and was married, but unhappily. One evening, after we had dined together at a restaurant, I took her back to my single room in Pall Mall. I became her lover. On the way back in a hansom to where she lived she asked me how long the affair would last. “Six weeks,” I answered flippantly. It lasted eight years. I shall call her Rosie.”⁶⁾

Cakes and Ale の中で Rosie を讚美し Alroy や Amy から嘲弄されても微笑の美しさを描いているがこの回想でこのモデルとなった女優を小説の中の Rosie に昇華させていることがよく理解できる。この女優との関係は6週間位だろうと Maugham 自身、言及したのだが実際は8年間も特別な関係にあり、ついに結婚を申し込むが断られる結果となる。

さて、この小説の中心人物は Maugham が結婚を申し込んだ Rosie と言っても過言ではあるまい。しかし、Rosie の原型が女優であったことは判明しているが、具体的に誰なのかということにあまり関心が示されていないように思える。

Robert L. Calder の *W. S. Maugham and The Quest for Freedom*⁷⁾ によると、1969年9月 Calder 氏は故 Sir Gerald Kelley との対話の中で驚くべき事実を知らされた。Sir Gerald Kelley は当時、Maugham と親交のあった人物で Rosie として文学の中に表われている女性の原型は劇作家、Henry Arthur Jones (1851-1929) の二番目の娘 Ethelwyn Sylvia Jones であると明言した。

通称 Sue と呼ばれた Ethelwyn は1883年 New Hampton の Lothian Lodge で生れ、すでに14才で舞台を踏み、地方巡行で経験をつみ、London にもどり、数々の舞台にのぼった。その中で注目に値するのは Maugham の劇⁸⁾にも出演していることである。Ethelwyn は1902年劇場支配人の Montagu Vivian Leveaux と結婚したが数年後、その結婚は失敗に終る。

Maugham は若い作家として、有名な社交家で G. W. Steeven 夫人の家 Merton Abbey にしばしば招かれた。Henry Arthur Jones も Merton Abbey の常連客で、彼の娘たちが常々、作家、俳優、女優、社交界の人たちと交際していたことから Maugham が Henry Authur Jones の娘 Ethelwyn と会ったことはうなづける。

1913年12月13日 Ethelwyn は Antrin 六代目の候爵の第二番目の息子 Angus McDonnell と結婚し、イギリスの Fives Ashes に住んでいたが Ethelwyn は 1948年4月3日、この地で死亡。

Ethelwyn が Rosie の原型であることは *Cakes and Ale* の第14章で Maugham が詳細に描写している絵の作者が Sir Gerald Kelley であることを本人が告白することでより確実になった。1972年 Kelley が死亡した時にもっていた一枚の写真 “Mrs. L. [Leveaux] in White 1907” は全く疑う余地もなく Rosie の肖像画である。Maugham が描いているように彼女は白の silk の服、髪は黒のピロードの蝶型リボン、その位置と姿勢は一致している。

Romembering Mr. Maugham の著者 Garson Kanin によると Maugham が Ethelwyn なる Rosie に結婚を申し込んだことが彼の唯一の機会だったと Maugham は言い、前述のように拒否されたことは Maugham の進路を変えさせることになる。

Maugham は結婚を拒否されても彼女に対する思いは消えず、その結果が *Cakes and Ale* の Rosie を生み出し、世間的に考えると、反社会的、反道徳を讚美と elegance へと Maugham の筆致を走らせたのは彼女に対する Maugham の並々ならぬ思いの結晶であろう。

この小説では Driffield は Thomas Hardy (1840-1928) をモデルとして Hardy を誹謗したとして物議をかもしだしたことで有名である。Heinemann 版 (1930) の Preface に次のような弁解をしている。

When the book appeared I was attacked in various quarters because I was supposed in the character of Edward Driffield to have drawn a portrait of Thomas Hardy. This was not my intention. He was no more

in my mind than George Meredith or Anatole France. As my note suggests, I had been stuck by the notion that the veneration to which an author full of years and honour is exposed must be irksome to the little alert soul within him that is alive still to the adventures of his fancy. Many odd and disconcerting ideas must cross his mind, I thought, while he maintains the dignified exterior that his admirers demand of him.⁹⁾

Hardy は田舎で誕生、世に認められるまでには長年月を要し、結婚も二度、田舎にもどって、イギリス文壇の老大家となり、小説の中の Driffield とかなり類似点をもっているが、また、相違点もある。つまり、Hardy は水夫生活をしたり、自分の小説の設定に Kent 州を用いたこともなく、Driffield のように騒々しく、陽気な気質ももっていなかった。彼の二人の妻たちの性格も Rosie や Amy とは似ても似つかぬものであった。また、Hardy がイギリス文壇であれだけの地位を得るために Driffield が patron 的存在である Mrs. Trafford を必要としたようなことは不要であった。もう一つの特筆すべき相違点は Hardy は詩人でもあったということである。結論的には実在した小説家と架空の小説家の文学上のいくら類似点があっても、私的な面で類似点があるという論拠を見出されない。Maugham は Heinemann 版の *Cakes and Ale* の Preface で述べているように、この小説は短編小説として、自分の蓄積した材料を使用するつもりであったが創作の継続性から創作した事件、動機、解釈に次々と付加されたというのが今日、妥当的ものの見方であろう。

Thomas Hardy の伝記が彼の二番目の妻 Florence Hardy によって *The Early Life of Thomas Hardy* (1840-1891) 及び *The Later Life of Thomas Hardy* (1892-1928) として公刊されたが、Hardy について外聞をはばかり秘密の部分は削除されているのである。今では研究者によってこの伝記は Hardy 自身が生前に書いたもので、真実の歪曲、隠弊等の責任は Hardy 本人にあるとされている。

こういう事に鋭敏な嗅覚をもつ Maugham がもしかすると Hardy の欺瞞に満ちた俗物性に気づいて、この小説をかいたのではないかという研究者もいることを附記しておきたい。

この小説には subtitle が “The skeleton in the cupoard” (戸棚の中の骸骨)

で「他人に知られたくない家庭内の秘密」を意味する比喩的表現で Maugham による irony が如実に表われている。Maugham の動機はどうであれ、Hardy を愛する熱狂者の心痛はひどく、また、多くの批評家たちが論ずる問題になったことは確かであった。

加えて、次に Alroy Kear についても Hugh Walpole (1884-1941) がモデルで Maugham は彼を十字架にかけたのであろうということで、この小説は大きな衝撃を与え Drifffield vs. Hardy 論争より烈しいものとなった。

Walpole は *Cakes and Ale* を読みつつ Alroy が全く自分の肖像だと感知し、大変な怒りを抱き、ついに彼は Maugham に抗議の手紙をかき、次のような返事を受ける。

My dear Hugh,

I am really very unlucky. As you may have seen I have been attacked in the papers because they think my old man is intended to be a portrait of Hardy. It is absurd. The only grounds are that they died old, received the O. M. and were married twice. You know that for my story I needed this and that there is nothing of Hardy in my character. Now I have your letter. I cannot say I was surprised to receive it because I had heard from Charlie Evans that Priestley and Clemence Dane had talked to him about it. He told them that it had never occurred to him that there was any resemblance between the Alroy Kear of my novel and you; and when he spoke to me about it I was able very honestly to assure him that nothing had been further from my thoughts than to describe you. I can only repeat this. I do not see any likeness. My man is an athlete and a sportsman, who tries to be as little like a man of letters as he can. Can you really recognise yourself in this? Surely no one is the more complete man of letters than you are and really you cannot think of yourself as a famous golfer and a fervid foxhunter. Nor is the appearance described anything like yours. Nor so far as I have ever seen do you frequent smart society. Frankau or E. F. Benson might just as well think themselves aimed at and Stephen McKenna much more. The only thing that you can go on is the fact that you also are a lecturer. I admit that if I had thought twice of it I would have omitted this. But after all you are not the only English man of letters who lectures, but only the best known; and it is hard to expect a writer, describing such a character as I have, to leave out such a telling detail. The loud laugh is nothing. All big men with the sort of heartiness I have described have a loud laugh. The conversation you mention in California has entirely slipped my memory and I cannot place it in the book. Really I should not have been such a fool. I certainly never intended Alroy Kear to be a portrait of you. He is made up of a

dozen people and the greater part of him is myself. There is more of me in him than of any writer I know. I suggest that if there is anything in him that you recognise it is because to a greater or less extent we are all the same. Certain characteristics we all have and I gave them to Alroy Kear because I found them in myself. They do not seem to me less absurd because I have them.

I do not think for an instant that there will be any reference to this business in the papers, but if there is I promise you that I will immediately write, protest and vehemently deny that there has ever been in my mind any thought of portraying you.

Yours always,

W. S. Maugham.¹⁰⁾

Maugham の甥 Robin Maugham はその著 “Somerset And All The Maughams” (1966) の中で Driffield は実は、これこそ William Somerset Maugham の真の姿なのだと言っていることは興味あることである。

(六)

Cakes and Ale は口語体で物語を展開していく形式をとっているがこれが読者をしてぐいぐいと引きつけ魅了させている。しかし、Maugham の成功は技法のみでなく、Driffield に焦点をあてつつ、彼の背後にひそむ生きた人間、つまり Rosie に Maugham の愛情と讃美が与えられ、人間的な幅は狭いが、豊かさがひそんでいる reality をもった人物として描いている。

Maugham は技巧を用いながら、無造作にこの小説をかいているような錯覚を与える巧みさ。Maugham 自身の feeling が Alroy Kear や Rosie に投影し、彼らの俗物的人間は Maugham 自身でもあったが故に烈しく表現されているように思われる。特に Rosie に対して Maugham の theme を解明する素材を見出す。それは Rosie を通じて、因襲を無視することができる人間こそが我々にほんとうの自由という遺産を相続できるのだということである。Maugham が求めてやまないものは自由——外部的、内部的自由である。

Cakes and Ale にはいろんな批判をあびることになるが、それは Maugham が文壇の大御所的存在にある作家に対して敬意を表さず、文壇に君臨している

ことを冷笑していることにある。Maugham は作家の老大家がいかに意図的に作られたものであるかということを暴露しているのである。

この小説は Rosie の物語であるともいえる。Maugham は利己主義な女よりだらしない女のほうが好きと断言し、Rosie はその断言を具現化した、もっとも魅力的な女性型の善良さ、ぬかりなさ、利己的でないところと解放的な肉体的魅力をもっているからである。

この小説の title, *Cakes and Ale* は Shakespeare の Twelfth Night II-iii にある語句で Webster によると the good thing of life, worldly pleasures とあり、まさに、これこそ、Rosie の生き方を表わしているといえるだろう。

(七)

Maugham はフランスからの自然主義とイギリスの唯美主義の影響を受けた作家である。

Maugham の人生哲学となった *Of Human Bondage* の Philip が到達した“ペルシャ絨毯の哲学”はこれらの影響そのものであるといえよう。

「人生に意味などあるものか」と *Of Human Bondage* の中で断言し、人生が無意味となれば何も心労することはない。現実的、世俗的なことにまどわされず、解放感をもちつつ生きる喜びのために生きていくだけでよい。

ペルシャ絨毯の織工は自分の審美感を満足させるために絨毯を織っているのである。

人生はなんらかの目的を実現させるためのものではなく、生きること自体がすでに人生の目的であるという19世紀の唯美主義者 Walter Horatio Pater (1839-1894) を素直に受け入れることが可能であろう。

この Maugham の人生哲学を礎に彼の作品は人生を素材に人間関係が織りなす人間模様を辛辣な irony を混入させて story teller としての真髓を発揮して、この *Cakes and Ale* の場合でも Maugham は体裁ばかり重んじて gentleman 風に、また、lady 風につくろっている人たちが人間としては中味が乏し

く、虚栄心ばかり強く、実のない人間どもなのだとすることを暴露し、対比として、Rosie や彼女と駆け落ちした George Kemp, 伯父の牧師館のお手伝い Mary, それに、下宿のおかみ、といった人たちの世間的には大して目立つ存在ではないが、誠実さ、純真さ、無邪気さ、善良さをもった庶民に対して大いなる讃美を Maugham の巧妙なる筆致で強調されているといえるだろう。

Maugham は *Cakes and Ale* の最後の第26章で70才の未亡人として Rosie を登場させ、彼独特の irony を表現しているが、この作品はさすがに Maugham の円熟期のものだけに、完璧さと抒情的温かみを感じさせる。

BIBIOGRAPHY

- Maugham, W. S.; *Cakes and Ale*, Heinemann 1930
 Maugham, W. S.; *Cakes and Ale*, Modern Library 1950
 Brophy John.; *Somerset Maugham, Supplement to British Book News*
 Maugham, W. S.; *The Summing Up and A Writer's Notebook*, Heinemann
 Calder, R. L.; *W. S. Maugham and The Quest for Freedom*, New York, Doubleday 1972
 Maugham, Robin; *Somerset and All the Maughams*, Greenwood Press Publishers
 Janas Klaus W.; *The World of Somerset Maugham*, Greenwood Press Publishers
 Curtis Anthony.; *Somerset Maugham*, Macmillan Publishing Co., Inc. New York
 Maugham Ted.; *Maugham A Biography*, Simon and Schuster New York

- | | | |
|-----------------|------------|---------|
| 「サマセット・モームの全小説」 | 越川 正三著 | 南雲堂 |
| 「モームの世界」 | 相良 次郎著 | 評論社 |
| 「モームの研究」 | 中野 好夫編 | 英宝社 |
| 「モーム」 | 上田 勤著 | 研究社 |
| 「モームの二つの世界」 | 山川 鴻三著 | 京都アポロン社 |
| 講座・イギリス文学作品論 | | |
| 「サマセット・モーム」 | 高見 幸郎著訳 | 英潮社 |
| 「英語研究」(1974-4) | 研究社 | |
| 「モーム、ハーディー」 | 筑摩世界文学大系66 | 筑摩書房 |
| 「モーム、グリーン」 | 世界文学大系60 | 筑摩書房 |

NOTE

- (1) *Cakes and Ale* (Modern Library 1950) PP.xi-xii
- (2) *W. Somerset Maugham and The Quest for Freedom* p.172
- (3) *Cakes and Ale* (Modern Library 1950) pp.192-193

- (4) op. cit., p.250
- (5) op. cit., p.251
- (6) Looking Back (Show, June 1962) p.67
- (7) W. S Maugham and the Quest for Freedom pp.269-272
- (8) Maugham の劇 Penelope. 1909年 Comedy 劇場で Peyton の役を演ずる。
- (9) Cakes and Ale (Heinemann 1930) pp.vi-vii
- (10) W. Somerset Maugham and The Quest for Freedom pp.176-177
(As quoted by Hart-Davis, Hugh Walpole: A Biography, pp.316-317)